（伝　説）

生　い　け　山

むかし　六十をすぎたとしよりは、たべるだけで　ろくにしごともできないので、たるみの「生いけ山」につれていかれたそうな。生いけ山では　よるになると　ひとだまがとびてくるので、むらの人は　生いけ山をたいへんこわがり　おそろしい山とかんがえていた。

ところが　あるわかものの家で　おかん（母親）を　つれていかねばならない年が　やってきた。そのわかものは、まえまえから　おやこうのわかものとして、むらのひょうばんになっていた。おかんは　まえまえから　むすこに　六十になったら「はよ　生いけ山に　つれていってくれるよう」たのんでいたそうな。

いよいよ　その日がやってきた。わかものは　日がおち　くらくなってから、おかんをせおい、いえをでた。わかものは　くらいので、生い け山に行く道が　はっきりせず、まごしていると、せなかのおかんが、「右じゃ」「そこ左じゃ」とおしえてくれたそうな。ところがそのあと　「ポキン「ポキン」と　おることがきこえてくる。なんのおとかと、わかものは　おもいながらも　いっしょうけんめい　のぼっていった。いよいよ　てっぺんにたどりつき、おかんをおろして　つちのあなに　いれた。そして　たけをさして　つちを　かぶせようとしたら　おかんが「むすこよ。おまえが　かえるみちには　木がおってあるから、それを　てさぐりに　おりていけ。そしたら　むらにおりられるし、いえに　いぬことができるさかい。」といった。わかものは　なきながら　わかれをつげ、いわれたとおりに　山をおり、やっと　家にたどりつくことが　できたそうな。

それから　なん日かたって、あるちを　あつめて　えらいむつかしはいで　つくった　ぞうりをそのため　わかものたちは　まいどうにも　よいかんがえが　うかいだも　はやく　はやくと　さいまで　きめられてしまったそうなむらの人はもちろん　となりのむれも　しっている人は　いなかったかものたちは　もう　だまりこんでしまい、こまりきって　しまった。すると　だれかが　「わしらみたいな　わかいものでは　むりなことや　どうや　生いけ山には　としよりがいる。きいてみたらどうや……」と　いった。そこで　わかものたちは　なるほどと　おもい、そうっと

生いけ山にいき、はいの　つくりかたを　おしえてもらったそうな。どうするかといえば、わらの　ぞうりを　いたの上にのせて、そぅーっともやし、かたちを　くずさんようにして　さしだすと　いうことであった。さっそく　わかものたちは　おしえられたようにしてとのさまに　さしだした。

　すると　とのさまは　たいへんびっくりされ「いったい　こんなちえを　もったものは　だれか」と　いわれ、へんじに　こまった　わかものたちは　としよりに　おしえてもらったこと　生いけ山とうとう　生いけ山したそうな。それを　きいた　とのさまは　「おまえたちが　どんなにしあんしても　わからんことを　おとを、おそるおそる　はくじょうしえてくれた。そんな　としよりを　すてるとは　どういうことじゃ」と　いわれた。それからはとしよりを　生いけ山に　つれていくことはなくなったそうな。

（垂　水）